

近現代における「指示・命令表現」について

——江戸期から平成期へ——

高澤 信子

はじめに

指示・命令表現は、ある行為をするように相手に強制することを述べる表現である。「誰が行動するのか」「誰に決定権があるのか」「誰のための行為なのか」という三つの観点から述べると、次のようになる。

「行動」相手／「決定権」自分／「誰のため」自分・相手・相手と自分
指示・命令の表現「早く片づけろ」「部屋を掃除しなさい」は、「自分・相手・相手と自分」「健康に注意しろ」は、「相手」のための表現となる。他方、「片づけてください」「掃除してください」という命令形は依頼表現となる。「行動」相手／「決定権」相手／「誰のため」自分

しかし、依頼表現と指示・命令表現は、どちらも話し手の依頼、あるいは指示・命令を聞き手に伝達し、話し手の意図を達成するために用いるものである。指示・命令表現は、丁寧に表現すると、相手に敬意を表し、決定権を委ねるといふ依頼表現となるのである。ただし、「～てください」を用いた場合でも、相手のためにその行為をすることを求める指示・命令表現ともなる。「痛むときには、この薬を飲んでください。」また、さらに丁寧な言い方にする、依頼表現の形式が用いられることもある。「痛むときには、この薬をお飲みいただけますか。」また、「お～ください」「～いただけますか」などという文型でも、丁寧に指示・命令表現として用いられることがある。

(駅員が乗客に白線の内側まで下がってほしい場合)

「白線の内側までお下がりにください」

「白線の内側まで下がっていただけますか」

「白線の内側までお下がりにいただけますでしょうか」

そこで本稿では、指示・命令表現を、江戸語以降についてどのような変遷を遂げて来たのかについて、次に明らかにしてみたい。

二 江戸語の「指示・命令表現」

二一 『浮世風呂』の「指示・命令表現」

『浮世風呂』(一八〇九年)には、社会階層の差によって指示・命令表現に多様な形式が見られる。

(一) 命令形を用いる ……男性、下層の女性

コレ鶴吉よ、履物を用心しろ (隠居↓鶴吉)

能(いい)、能(いい)、待居ろ。(お舌↓娘おべそ)

命令語尾「よ」が「い」に転じた上方語も見える。

お山さん、あれ見イ。(かみがた↓お山さん)

この命令形に終助詞「よ」「え」が付くこともある。

小僧だまつ居(て)ろよ。(隠居↓丁稚)

コレ、ヤイ、は、は、張くぢいて見ろエ。(酔↓いさみ)

「や」「やな」(助動詞「やる」の命令形「やれ」の転)が接続した例もある。

打遣(うつちやつ)ておきや。(ともだちの下女↓ゆくみの男)

エエ、しんどきになるなら為(し)て見や。(おでこ↓おては)

エエコレ、だまつて居やナ。(彦↓晩)

また、「〜やれ」「〜をれ」の形もあり、前者には終助詞「よ」「な」も付く。

コレ聴(き)きやれ。(きも↓あば民)

おのしはよく温(あつたま)りやれよ。(しうとめ↓下女おやす)

そこぢやア水盃(みづさかづき)でもしてかかりやれナ。(きも↓

二人)

ヲヲ、三十五文か、おどれまけをれ。(けち↓商人)

漢語語幹で用いる例も見える。

あのはア、勘平(かんへい)を御覧。(女房↓下女おやす)

下層階級では「〜やあがれ」という表現も見える。

ヤイ、見やアがれ。(お舌↓子供)

(二) 連用形の前に「お」を付ける ……中層以上の女性

サアサア、お玉は衣(べべ)をお脱(ぎぬ)ならここへおよこし。(母

↓杉)

へイ、あなたお静(しづか)に。(下女おやす↓しうとめ)

これに終助詞「よ」「な」がつくこともある。

能(よく)お聞(きき)よ。(山↓かみ)

おはるさん。堪忍してお遊びナ。(なつ↓はる)

男も子供では用いられた。

能く下を見ておあるきよ。(男↓男の子)

(三) 連用形に「ねえ」「ね」(いずれも助動詞「なる」の命令形「ない」

の転)を付ける。…男性、特に商人、および下層の女性

四ツ目へ往(いつ)てみねへ。(商人↓けち)

起ね起ね(おけねおけね)(ぶた七↓男)

これに終助詞「な」「よ」が付くこともある。

あのまア、おらが内を聞(きき)ねへナ。(した↓お鳶(とび)さん)

アレ、よしねへよ。(亀↓松)

軽い敬意を付けた「さい」(助動詞「さる」の命令形の転)を用いた例

もあるが、次のような歌謡のような表現の一部に見られるだけである。

向見イさい。新川見イさい。(にく↓冬)

(四) 連用形に終助詞「な」を付ける……中層以下の男女

コウ、能(いい)加減に磨(みがき)な。(お鳶↓お泥)

コレコレ、三助どん。最(も)うちつと待(まち)なナ。(男↓三助)

これに終助詞「な(なあ)」「よ」が付くこともある。

最(も)うひとつうたひなナ。(お松↓そばの女)

お髪(くし)だの、へつたくれのと、そんな遊(あそび)せ詞(こ

とば)は見ツとむねへ。ひらつたく髪(かみ)と云(いひ)なア。(ゆ

くみ↓お丸)

コレサコレサ、おてばどん。マア黙止(だまん)なよ。(おてば↓

おでこ)

(五) 「〜ないか」系を用いる

否定の助動詞「ない」に疑問の「か」を付ける表現を命令の意に用い

る。ただし、「ない」の訛った「ねえ」が用いられる。

コレ、しづかにしねへか。(番頭↓子供)

エエ、しやれずと早く汲(くま)ねへか。(ゆくみ↓ともだちの下女)

「ねえか」が縮まった「〜ねか」の語形でも用いられる。

起ねか起ねか(おけねかおけねか)(ぶた七↓男)

また、否定の「ん」が用いられた例も上方者に使用が見られる。

お山さんあつちや向(むき)んか(かみがた↓お山さん)
ちなみに、疑問の「か」に終助詞「い」が添えられて、相手に行動を促す意を表す例もある。

イヤ、遣れ遣れ。遣つてさせかい。(後↓先)

(六)「しやる」系を用いる ……中層以上の男女が用いる

助動詞「しやる」「さしやる」の命令形「ししやい」「さししやい」を用いる。

貴さまの着物も、薄綿になつては夫限(それぎり)だと思はつしやい。(八兵衛↓番頭)

上(うへ)つ方の御奉公する女中衆を見さつしやい。(女性↓女性)
その命令形「しやれ」に終助詞「な」が付くこともある。

湯へ入た跡で、借切の者が兎の角のいはば、からだの湯の気をさまして帰さうから、其時、湯銭をも、おれに帰しやれな。(酔↓番頭)

これらには相手に対する軽い敬意が込められている。

「しやる」から転じた「つせえ」「つし」も用いられるが、敬意はほとんど見られない。

ながしを能く洗はつせへ。(番頭↓若い衆)

・コレコレ、喜代や。おのしはの、お茶の支度をさつせへよ。(辰↓下女喜代)

能(ゑへ)加減にさつし。(とび八↓直兵衛(ちきべゑ))

「しつし」は男性のみに用いられている。

(七)「んす」系を用いる

丁寧な言い回しの助動詞「んす」の命令形「んせ」、これに終助詞「や」を付けて用いる。

早うおこして、其體(からだ)雪(すす)がんせ。(かみがた↓西国さいこく)

おまへ又何なと立(たて)さんせ。(山↓かみ)
マア、聞(きか)んせや。(けち↓番頭)

この「んせ」は「けち」と記す登場人物に多くの使用が見られ、遊里の女性の言い回しをわざと用いていた表現であると見られる。

コレコレ、またんせ。(けち↓商人)

また、「けち」は助動詞「やんす」の命令形「やんせ」を用いた例も一例見える。

番頭さん、其代(そのだい)に見やんせ。(けち↓番頭)

(八)「なざる」系を用いる

尊敬の補助動詞「なざる」の命令形「なされ」を用いるが、次の二例しか見えない。

しかしおまへの浄瑠璃は、やつぱり住さんの性根で押(おし)て行(いき)なされ。(太夫↓義遊)

ササ、十六文、それへお取(とり)なされハハハ。(けち↓商人)

この「なされ」に終助詞「や」を付ける例も「けち」に見えるだけである。

待(まち)なされや。(けち↓青物うり)

コレコレ、銭を改めなされや。(けち↓商人)

十九世紀初めごろには「なされ」という語形はかなり古風な言い方であったと見られる。これに対して、「なさい」、その訛った「なせえ」が圧倒的に多く用いられている。

チトお出(いで)なさい。(医者↓番頭)

サア、かきまはしなさい。(湯くみ↓ばち)

「なせえ」は下層階級で用いられている。

おめへの所(とこ)のも随分信心して看病しなせへ。(女性↓女性)

ソリヤソリヤ、言(いは)ねへ事か、夫(それ)見なせへ。(おたこ↓子供)

マア、おばさん聴(きき)なせへ。(かも子↓おばさん)
これらに終助詞「な」を付けても用いる。

静(しづか)にしなせへな。(お舌↓ばば)

必(かならず)好(いい)男を持たさんな。(女房↓下女おやす)
これらの前に接頭語「お」を付けた例も中層以上で用いられている。

お待(まち)なさい。(鬼↓点)

きも右工門(ゑむ)さん、お出(いで)なせへ。(中六↓きも)

また、敬意を高めるために、連用形に尊敬の補助動詞「ます」を付けた例もある。

いへもうおゆるりと御覧なさりませ。(かも子↓けり子)

ちよつとお聞(きき)なさいまし。(おいか↓おたこ)

さらに接頭語「お」を付けても用いられる。ただし、「なさいまし」に付く。

今日(こんにち)はお仲をお直りなさいまし。(おむく↓女)

お衣(べべ)をお脱(ぬぎ)なさいましよ。(下女↓徳松)

(九)「ます」形を用いる

尊敬の補助動詞「ます」の命令形「ませ」を用いた例は次の二例だけである。

番頭さん、一寸(ちよと)一盃(いつはい)湯を仰付(おほせつけ)

られます。(けち↓番頭)

どうぞ御覆藏(ごふくざう)なくおつしやつて下さりませ。(点↓鬼)

前者は「けち」の発話に用いられたものであり、「ませ」は古風な言い回しであると見られる。多くは「ませ」の訛った語形「まし」で、男女ともに用いられている。

どうぞ御不肖なさつて遺(つかは)さりまし。(番頭↓女)

ワットワット、云はれずは春永におつしやいまし。(初↓むす)

あのまア雪を御覧(ごらう)じましな。(女性↓女性)

(十)「あそばす」系を用いる

高い尊敬を表す補助動詞「あそばす」の命令形「あそばせ」を接頭語「お」とともに用いるのは上層の女性に限られる。

マア、すこしお待遊ばせ。(よめ↓しうとめ)

サアサア、お出し遊ばせ。(初↓むす)

ちなみに、「お〜もうせ」という例も見える。

早くここへお通し申せ。(へんし↓男)

(十一)禁止の終助詞「な」を付ける

否定の命令表現である禁止の表現は次に一括して示す。

○動詞+な … コリヤコリヤ、じゃうけるな じゃうけるな(ふざけるな)(けち↓商人)

○んす+な … ハテ、其様(そない)に氣短(きいみぢか)くいは

んすな。(けち↓商人)

○んす+な+え … 腹立(はらたた)んすなエ。(けち↓商人)

○ます+な … アア、モウおつしやいますな。(初↓むす)

○なざる+な … 世話をやかせなざるな。(八兵衛↓番頭)

ただし、多くは訛った形の「なさんな」が用いられる。

そんなに云ひなさんな。(お薦↓お舌)

○お〜なさいます+な … おまへさんお構ひなさいますな。(角↓

丸)

○お〜でない(専ら女性が用いる) … 其様(そんな)に情をお張

でない。(おてば↓お大根)

おまへさんがた、喧嘩(けんくわ)をお為(し)でないよ。(おと

な↓子供)

(十二)その他

○下略による … イヤ、モシ、そんなにお手をおつけなすつては…。

(二階番↓酔)

○タ形の繰り返し … サア、帰(けへ)った、帰(けへ)った。

(かかさま↓太吉)

○「のだよ」… コレ、鳴込(なりこん)で能(よ)けりやア、こ

つちから鳴(なり)こむのだよ。(ばば↓お舌)

○「もんじゃねえよ」… 吉さんも又さんも喧嘩するもんじゃやアね

へよ。指切をして中直んな。(幸↓吉と又)

○「がいい」… 直(すぐ)に帰(けへ)るがいい。(かかさま↓太吉)

二二 ブラウン『日本語会話』の「指示・命令表現」

宣教師の Brown, S. R. によって執筆された『SENTENCES IN ENGLISH and JAPANESE COLLOQUIAL』(一八六三年)は、アメリカ人が執筆した初めての日本語教本で、幕末期日本語の実態を窺う上で適した資料である。この書に見える指示・命令表現を文末表現によって分けて次に示す。

(一) 命令形を用いる。

まばたきのまに しろ。

・こづかいをよんでくれ。

わたしのかさとみのを かってきてください。

「〜てください」は「〜てくれ」の丁寧体である。『浮世風呂』には次のような「〜くださりませ(し)」という文型しか用いられていなかった。

どうぞ下に被成(なすつ)て下さりませ。(番頭↓酔)

どうぞ御覆蔵(ごふくざう)なくおつしやつて下さりませ。(点↓鬼)

この頃には「ませ」を脱した形が既に定着していたように見られる。

(二) 「なさる」系を用いる。

○「〜なさえ」… あしたのあさはやく きなさえ。

○「お〜なされ」… みようあさはやく おいでなされ。

○「なされまし」… まばたきのまに なされまし。

○「なさいまし」… すなおに なさいまし。

○「お〜なされてください」… みようあさむつどきに わたくしをおおこしなされてください。

○「〜ておいでなされ」… そのこくげんにたがわず あちらにまっておいでなされ。

『浮世風呂』に多く見えた「なさい」の使用が文末にはなく、「なされ」「なさえ」となっている。「なさえ」という口頭語的な要素が色濃く残っていたものと見られる。

このように、Brown (一八六三年)では、指示・命令表現に用いられる文型は数が少なくなっている。これは、もちろん規範的な言い方を示したものであるから、典型的な江戸語資料である『浮世風呂』とは性質が異なるものの、共通語的な言い方では、表現形式がかなり単純化される方向にあったものと見られる。

ちなみに、次の表現は指示・命令表現を用いているが、「〜くださいませぬか」と述べることで依頼を表していると見られる。

あなた そのふでを いっぱんわたしに くださりませぬか。

あなた そのふでを いっぱんわたしに くれぬか。

あなた わたくしに そのようなしなを ひとつ たずねて くださいませぬか。

あなた わたくしに そのようなしなを ひとつ たずねて くれぬか。

あなた わたくしに そのようなしなを ひとつ たずねて くれぬか。

三 明治期の「指示・命令表現」

『安愚楽鍋』(一八七二年)では、「〜てくれ」「くれろ」「くんな」「おくんなし」「〜なさい」「〜おしいでない」などの表現が見られるが、

基本的には『浮世風呂』の語法に準じたものである。次に、英国人外交官の Satow, Ernest Mason によって執筆された『KWAJWA HEN』（一八七三年）を見てみる。この書は明治初期の日本語会話教本で、明治期の言語生活を垣間見ることができ、話し言葉を中心に書かれており、当時の話し言葉の実情、特徴を捉えるのに適していると思われる。ここに見られる指示・命令表現を次に示す。

- (一) 命令形を用いる
すぐに もってこい。
ておけに いっぱい うめてくれろ。
- (二) 連用形の前に接頭語「お」をつける
そのほんを おみせ。
- (三) 「なさる」系を用いる
「お～なさい」きばって おかいなさい。
「～ておくんなさい」さきによって おくんなさい。
- Brown（一八六三年）には「なさえ」が用いられていたが、明治初年になると、「なさい」という語形に固定化する傾向があったように見られる。
- (四) 「くださる」系を用いる
「～てください」どうぞ わたしに わけてください。
「お～ください」もうすこしのちに おいでください。
- Brown（一八六三年）には「お～なされてください」というように「くだされ」が用いられていたが、この頃には規範的な言い方では「ください」が用いられるようになったと考えられる。
- (五) 禁止
○「～な」… こちらへ とうせ、そうして とをあけつばなして おくな。
- (六) その他

○「お～もうせ」… こちらへ おとおしもうせ、そうして おきゃくとはなししてるところへ くちを きくものじゃないぞ。
○「～がいい」… もっとはやく おきるがいい。
○「～ともいい」… そんなことを いわずとも いい。
○「～たい」… しどうを どうぞ たのみたい。
ちなみに、同じ日本語会話教本である Brown（一八六三年）と Satow（一八七三年）を対象として、「なさい系」「ください系」「いい系」の三分に分けて調査分析した結果は「表一」とおりである。

「表一」 指示・命令表現

	Brown 江戸末期	Satow 明治初期		Brown 江戸末期	Satow 明治初期
なさい系			ください系		
なされ	113	0	くだされ	29	0
なさるな	26	1	くれろ	11	2
なされまし	24	0	くだされまし	4	0
なさい	22	12	ください	0	21
なさえ	5	5	くんな	0	16
なさいまし	1	3	くださいまし	0	4
			いい系		
			～がいい	0	17

この「表一」によると江戸後期から明治期へ移行して、減少したのは、「なされ」「なさえ」「なさるな」「なさい」「なされまし」などの「なさい系」、「くだされ」「くだされまし」などの「くだされ」形である。逆に、増加したのは、「ください」「くださいまし」の「ください」系、「～

がいい」の「いい系」などであることがわかる。江戸後期から明治期に移行し、日本国民の生活も明治維新（一八六八年）で大きく変わったのに付随し、言語生活も大きく変化した時代であったと推測することができる。指示・命令表現も「なさい系」から「ください系」へと変化した時代であったと言えよう。「〜がいい」は、相手の立場に配慮した表現を用いるようになってきたと見ることができようであろう。

四 大正期・昭和期・平成期の「指示・命令表現」

四一 大正期の「指示・命令表現」

「依頼表現」は大正期の雑誌『女性』（一九二二～一九二八年）では、「〜てちょうだい」「おくれよ」「〜ておくれ」「てください」「〜たまえ」等の表現が用いられた。「指示・命令表現」は、『女性』では、「〜てちょうだい」「〜てください」「〜なさいよ」「〜なさいな」「やってみたまえ」等の表現が見られた。

四二 昭和期の「指示・命令表現」

『婦人公論』（一九六四年）では、「〜なさい」「〜してね」「お〜になって」「お〜くださいまし」「〜しないでちょうだい」「〜てちょうだい」等が用いられていた。昭和期に入り「〜していただきたい」という表現が用いられるようになった。

指示・命令表現は、話し手の意図する動作や状態を遂行・実現するように命じる表現であるが、禁止・希望・勧誘などの意味で用いられる場合がある。希望・勧誘の表現として用いる場合は、他の柔らかい消極的な表現形式を用いる。

窓を開けてくれ。（指示・命令表現）

窓を開けてほしい。（希望表現）

窓を開けてもらえませんか。（依頼表現）

相手の抵抗感を避けて、命令の意図を達成するために「希望」「依頼」の表現にして、円滑に命令の目的を達成しようとするのである。「たくさん食べなさい」「もつと食べていきなさい」と指示・命令表現を用いても相手のためにプラス（利益）になる場合は、話し手から見て相手が上位者でない限り、指示・命令表現を用いて相手に不快感を与えることはない。

また、丁寧な指示・命令表現として「てもらえ」「てもらえないか」という形も採取できた。

「俺はもう次官じゃないんだから、憲兵は要らん。遠慮してもらえ」と藤田に命じ、その憲兵を原隊へ追い返してしまった。（阿川弘之『山本五十六』三〇頁）

堀悌吉はこの時未だ健在で、発表の寸前にこれを知り、さる筋を通して、「出すのをやめてもらえないか」と朝日に差止めを望んで来たが、（阿川弘之『山本五十六』二二頁）

ここでは、恩恵を受ける表現として丁寧な指示・命令表現になっている。

四三 平成期の「指示・命令表現」

平成期には「〜させていただきたい」「〜させていただく」という依頼表現が多用されるようになった。この「〜させていただけでもよろしいでしょうか」が、指示・命令表現の代用として用いられるようになった。例（看護師↓患者）「ここに横になっていただいてもよろしいでしょうか。」「横にさせていただけでもよろしいでしょうか。」

実際は、「ここに横になってください」という指示・命令表現となるところを、相手がその行動をとるように許可を求める表現にして、柔ら

かい表現に見せている。看護師は患者に「許可求め表現」を用いているが、実際には患者に、横になるかならないかという選択肢はない。この表現は明らかに「ここに横になってください」と指示しているのである。それを、相手に、それを行う「許可」を求めるといふ表現にしているのである。例…(医者↓患者) 手を上げてもらえますか。「手をあげてください」という指示命令の意と同じであるが、依頼表現にして相手との関係を緩和していると見られる。このような表現は、江戸期、明治期、大正期には見られなかった。現在平成期では、「くもらえませんか」「くもらいたいですか」「くっていただけませんか」「くっていたきたいんですか」などの表現を用いる場合が多い。

五 分析結果と考察

調査の結果、指示・命令表現に関しては、次のことが明らかになった。

- (一) どの時代（江戸期から平成期）であっても、命令表現を依頼表現にして丁寧さを表しているが、平成期に近づくに従って、婉曲表現（くさせてください。くらせていただきます。）等が多用されるようになった。
- (二) 「てください」「おくください」は明治期の初期に見られるが、現在用いられている「くてください」は明治期に入ってから用いられることが多くなった。
- (三) 「くりやれ」「てくりよ」等の表現は江戸期のみに見られる表現で、Brown（江戸後期）とSalow（明治期）の資料、『安愚楽鍋』（明治期）でも「くれよ」となっている。
- (四) 江戸期の研究では、命令形の命令語尾は、関西系が「よ」、関東系が「ろ」になる傾向があると言われているが、明治期でもそれを確認することができた。
- (五) 外国人資料から推し量ると、江戸期後期から明治期へは、「なさ

い系」から「ください系」「くがいい系」へと移行していったとみることができると。

- (六) 明治期には、「てくれい」から「てくれろ」に移行している。
- (七) 昭和期に入り、「くしていただきたい」といふ表現が用いられるようになった。

- (八) 日本語の命令形には、丁寧さのレベルがある。

(指示・命令表現) 「あっちへ行け」「あっちへ行きな」「あっちへ行けよ」「あっちへ行つた」「あっちへ行きたまえ」「あっちへ行きなさい」

(希望表現) 「あっちへ行つてほしい」

(依頼表現) 「あっちへ行つただけですか」

〔主要参考文献〕

- 沖森卓也（一九八七）『日本語史』おうふう
蒲谷宏他（一九九八）『敬語表現』大修館書店
菊地康人（一九九七）『敬語』講談社
小島俊夫（一九九八）『後期江戸ことばの敬語体系』笹間書院
小松寿雄（一九八五）『江戸時代の国語江戸語』東京堂出版
辻村敏樹（一九六八）『敬語の史的研究』東京堂出版
森田良行・松本正恵（一九九八）『日本語表現文型』明治書院
『新潮文庫の100冊』新潮社

〔付記〕本稿は「日本語学会二〇一四年度秋季大会」（於 北海道大学）において研究発表したものに加筆、修正したものである。

（たかざわのぶこ 日本学研究所研究員）